

2020年度図書館活用推進校の事業の取組

新潟市立葛塚中学校

1 葛塚中学校図書館と生徒の実態

【生徒数等】

- ・ 15学級、生徒数347名

【図書館の位置】

・ 図書館は3階の校舎のセンター的に位置にあり、また教務室の並びにあるため比較的足を運びやすい。施設としては、コンピューター室と接続して、メディアセンターの中の図書スペースとして廊下との壁がなくオープンな図書館となっている。

【蔵書】

- ・ 蔵書は12,987冊で基準を満たしている。

【図書館利用】

- ・ (コロナ禍前) 昼休みに図書館を開放し、図書好きの生徒中心に利用している。壁がなく廊下に面しているため少しにぎわうときもあるが、生徒の多くは好意的に「読書センター」として図書館を利用していた。
- ・ (コロナ禍以降) 予防のため、図書利用は激減した。昼休みで図書館に本を借りると図書館から出て行く人が多く昼休みを図書館で過ごす人は少ないのが現状である。
- ・ 令和元年度は、図書の貸し出し数5,633冊(1人平均16.23冊)
- ・ 令和2年度1月現在までの図書の貸し出し数は、3,518冊(1人平均10.13冊)
- ・ 放課後に3年生の一部の生徒が自習に使っている。
- ・ 「読書センター」として利用が多く、「学習センター」「情報センター」としての利用は少ない。

【その他】

- ・ 新聞も閲覧できるようにしているが、手に取る生徒は少ない。
- ・ 進路情報コーナーでは、1,2年生が時折高校のパンフレットを手に取っている様子がある。

2 学校図書館活用推進の目標

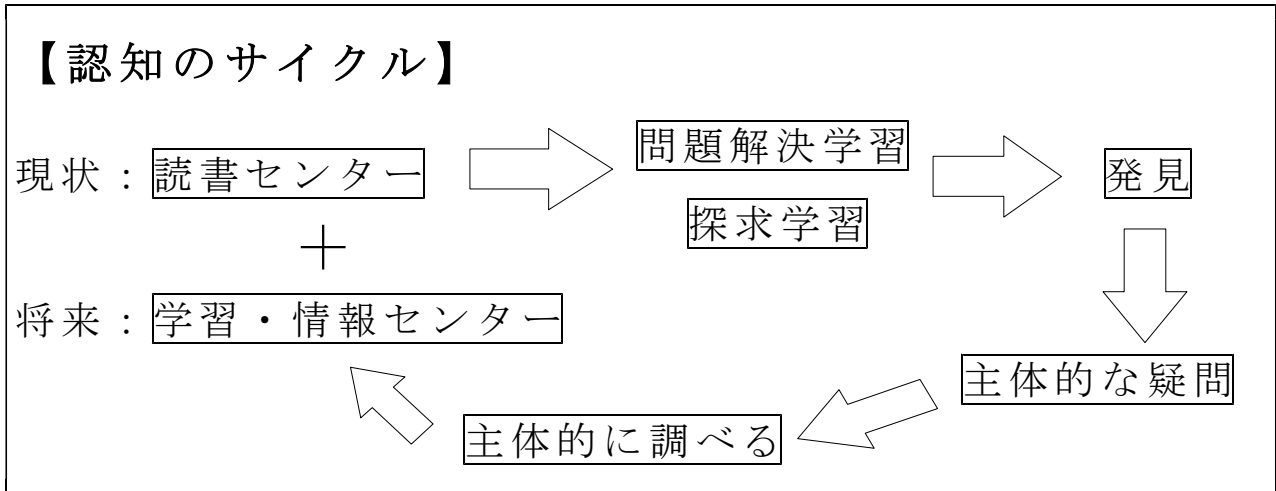
実態を踏まえ、今年度からの図書館教育の重点目標から2点をあげた。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①生徒の「学習センター」「情報センター」としての認知を高める。②小中学校の連携を活性化し、図書利用の推進を図る。 |
|---|

3 方策および実践事項

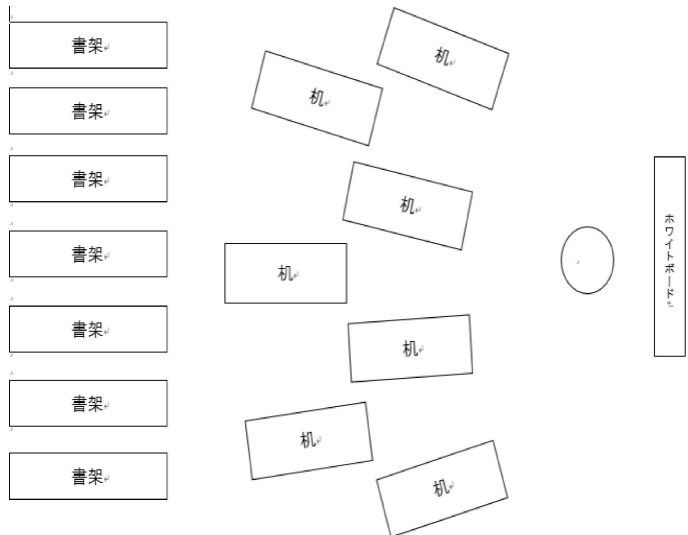
①生徒の「学習センター」「情報センター」としての認知を高める。

①を進めるに当たって、下の図のような認知のサイクルを設定した。これが回るようになると、「学習センター」「情報センター」としての認知が高まるのではないかと思う。この図を実現するために図書担当、図書館司書で以下のことを実践した。



・ 図書スペース内の配置について

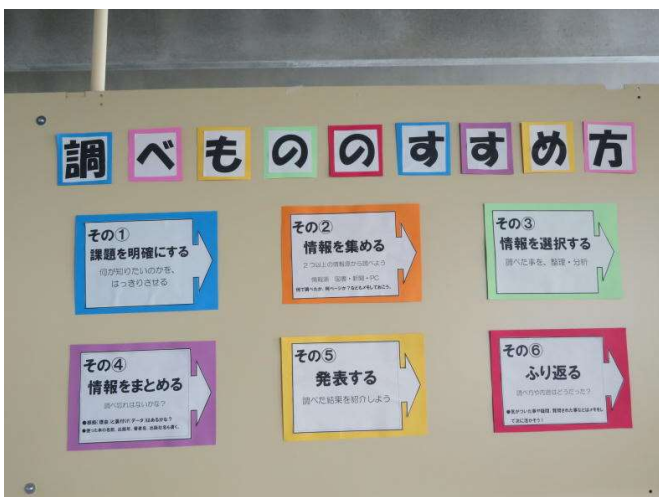
4月の利用前に学習センター・情報センターとして使いやすいように配置換えをした。教師を正面に半円に机を配置し、さらにコロナ予防対策として前後に机をずらしなるべく密にならないようにした。しかし、4月の休校期間からより密を避けるという理由から、やむなく昨年度の読書センターの機能を重視した配置に戻した。よって、学習センターの機能を意識した配置は、図書館で授業をするときに臨時的に配置するようにした。



←昨年度の配置

・ 掲示について

調べ方のマニュアルを掲示した。



・ 「進学情報コーナー」「新聞閲覧コーナー」の設置



・ 授業での活用の実例

総合学習… 1～3年 調べ物学習での活用

国語… 3年 言語と俳句の授業で活用

2年 短歌の授業で活用

1年 言語学習で活用

家庭科… 1～3年 資料集めに活用

特別支援学級…進路学習で活用

3年国語の様子



・ 2年 国語短歌の授業での活用実践から

2年生の短歌の授業を行い、P2の「認知のサイクル」の実践により、問題解決型の学習を取り入れた。1限目に班で選んだ短歌の問いを考えさせ、その問いを図書等で調べ、短歌の世界を広げることが学習の目標であった。1学年時に国語の授業ではこのような形態の学習はしておらず、班で協力して膨大な情報の中から欲しい情報を取捨選択するのも国語の授業では初めての学習だった。



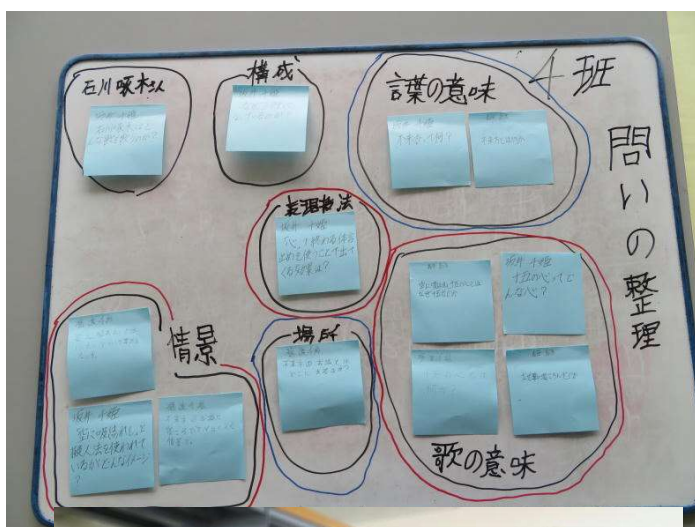
レファレンスカード

氏名 ()

※編者・著者

※図書・さんからの返え

このクラスでの授業前のアンケートでは「図書館司書に図書のことについて質問したことがあるか」という問いでは12.9%の生徒が「ある」と答えており、図書館司書の利用が少ないことがわかった。改善の手立てとして、授業の初めに図書館司書がレファレンスカードを班に渡した。どの班も辞書調べから始まったが、なかなか見つからない問いに関しては、自ら図書を探しに行ったり、レファレンスを利用したりして学習を進めていた。1限目は、インターネットを利用せず、図書だけという条件で学習を進めた。



2 限目は、前時に調べられなかった問いをインターネットで調べることも可とした。インターネットと図書を利用することで、より理解が深まったという感想があった。事後アンケートでは、「図書館司書に図書について質問したいと思うか」という問いに対して 58.0 %の生徒が「はい」と答えている。また、「この授業を通して図書館利用のイメージが変わったか」という問いで



は 37.5 %の生徒が「はい」と答え、「たくさん調べることができるを知った。」「調べるときに役に立つ」「司書の先生に質問していいことが初めてわかった。」などの記述があった。

② 小中連携の充実

・小学校への提案

今年度は小中連携に当たり、中学校では2つのことを提案した。1つめは、新入生により図書館を身近に感じてもらう目的で、6年生にアンケートを実施すること。2つめは、「学習スペース」・「情報スペース」へ意識を高めることを目的として、小中連携して系統的な「調べ学習」の流れをつくることである。そのために4回の小中連携の話し合いをもった。

1回目（4月）

今年度の図書館活用推進について情報連携の会をもち、児童生徒の図書館利用の促進を目的に2つの提案があった。①「中学生（図書委員会）が小学校に行き、読み聞かせをする。」②「部活動の体験入学の時に、図書館を見てもらい、本に親しむ機会をもつ。」というものである。しかし、新型コロナウイルス予防のため、実施できなかった。この2つは来年度の実施としたいと考えている。

2回目（6月）

小・中学校のコロナ禍での対応について情報交換をする。また、中学校の図書館の環境を小学校の図書館教育担当教諭・図書館司書に見てもらい、「情報センター」の共有を図った。

3回目（8月）

小・中の調べ学習の系統的な流れの共有化を図る目的で、小学校の先生が中学校に来校し、国語の授業での図書館の活用状況を参観することを決める。また、来年度の新1年生に魅力のある図書館とじてもらう手立てとして11月をめぐりに小学6年生に蔵書希望アンケートをとり、図書購入の参考にする。

4 回目（10月）

中学校の国語授業を参観。中学校での調べ学習の実践を見ていただき、小学校での調べ学習に生かしてもらうのがねらい。授業後の情報交換では、小学校では基本的な調べ方を徹底して身につけさせ、中学校ではその前提で探求学習をスタートすることを確認した。

4 成果と課題

①「生徒の「学習センター」「情報センター」としての認知を高める。」について

2年生国語の短歌の授業の振り返りで、「学習が楽しかった。」「調べる前と後では短歌の雰囲気が変わった」「意欲的に学習できた。」などの声があった。事後アンケートでも出ているように「読書センター」だけの図書館ではない新たな「学習センター」「情報センター」の認知が生まれたのではないかと思う。このことから今年度は、「発見の喜び」を生徒に学ばせることができたと思う。国語科としては来年度も引き続き国語の授業で系統立てて問題解決学習・探求学習をすることで、より強く意識改革ができるのではないかと考える。また、他教科も図書館を利用してP2の「認知のサイクル」が確立すれば、図書館の「学習センター」・「情報センター」としての機能が充実してくると思う。ただし、これは学校全体で取り組むことが大事である。当校ではまだ教師側において図書館が「学習センター」「情報センター」として機能させることへの意識が弱い。これからの課題として、教師へ向けてこの認知を広げ、図書館を利用してもらうことが来年度への課題である。そして、生徒に向けて図書館の機能のあり方を広げてもらいたい。今年度はその1年目として以上のことを来年に引き継ぎたい。

②小中連携の充実

今年度はコロナ禍で両校ともに図書館への利用が制限された。そのため、できないこともあったが、機会があれば児童と生徒の交流を実現させたい。この状況下で4回の話し合いの機会をもち、その度に図書館のあり方を確認できたことはとても貴重だった。特に、問題解決学習や探求学習の仕方など、系統的に仕組みがつくれると中学校で発展的な学習の時間が確保されやすくなり、図書館の機能がより充実してくると予想できる。図書館教育での小中連携をこれからも続けていくことが課題であると思う。